

歯周病学の進歩に関する研究 — Jan Lindhe 著臨床歯周病学教科書日本語版第1版と第4版を比較して —

Differences Between the First Edition and the Fourth Edition of the Textbook of
Clinical Periodontology Written by Jan Lindhe.

吉田 直樹 海老名 和子

YOSHIDA Naoki

EBINA Kazuko

I. 緒言

歯周病学は、近年著しく進歩している。歯周病の病因論に関しては、歯周病原細菌の病原因子の研究や、病原因子と宿主との相互作用について多くの重要な報告がなされている。さらに歯周炎の危険因子が存在すること、その有無が歯周炎の発症頻度や重症度と関連があることが報告されている。また、それとは逆に、歯周炎が全身疾患に影響を与えることも報告されている。歯周病原細菌の内毒素や局所で産生される炎症性メディエーターにより、心臓・血管系疾患、早産・低体重児出産、糖尿病、誤嚥性肺炎などのリスクが上昇するといったことが報告されている。治療法に関しては、歯周組織再生治療といった、新しい方法が開発されている。さらには、サイトカイン療法や、細胞移植療法といった方法も現れている¹⁾。

歯周病の教科書として代表的なものであり、世界各国語に翻訳されているもののひとつとして Jan Lindhe 著の教科書がある。Jan Lindhe が著した Textbook of Clinical Periodontology 第1版²⁾ が1983年に発行され、その日本語版³⁾ が1986年に発行されている。そして、第4版⁴⁾ が2003年に発行され、その日本語版⁵⁾ が2005年に発行されている。今回、著者らは、第1版の日本語版と第4版の日本語版を比較することにより、約20年の間における歯周病学の変遷に関して調べることにした。

II. 材料と方法

「Lindhe 臨床歯周病学 日本語版第1版（岡本浩 監訳）1986年発行」および「Lindhe 臨床歯周病学とインプラント 日本語版第4版（岡本浩 監訳）2005年発行」の2冊の間において比較を行うこととした。

両者のそれぞれの、1. 構成、2. ページ数、3. 章の数と名称に関して比較することとした。

III. 結果

1. 構成について

第1版と第4版では、題名自体が異なっていた。第1版は、「Jan Lindhe Text book of Clinical Periodontology.」で、日本語版は、「Lindhe 臨床歯周病学」であったのに対して、第4版は、「Clinical Periodontology and Implant Dentistry.」で、日本語版は、「Lindhe 臨床歯周病学とインプラント」となっていた。また、第1版では1冊にまとめられていたものが、第4版では、「基礎編」、「臨床編」、「インプラント編」の三編に分けられていた。

表 1. Lindhe 臨床歯周病学日本語版第 1 版の章立て

第 1 章	歯周組織の解剖
第 2 章	歯周疾患の疫学
第 3 章	プラークと歯石
第 4 章	歯周疾患の微生物学
第 5 章	歯周疾患の病因
第 6 章	若年性歯周炎（歯周症）
第 7 章	壊死性歯周炎
第 8 章	咬合性外傷
第 9 章	歯周治療と歯内治療との相互関係
第 10 章	歯周組織にみられる全身疾患の症状
第 11 章	歯周組織に由来する腫瘍および腫瘍類似疾患
第 12 章	歯周疾患の診査
第 13 章	治療計画
第 14 章	原因除去治療期
第 15 章	歯周外科：目的と適応
第 16 章	歯周外科：器具
第 17 章	歯周外科：術式
第 18 章	歯肉歯槽粘膜手術
第 19 章	再付着と新付着
第 20 章	根分岐部病変の処置
第 21 章	咬合治療
第 22 章	歯周補綴の技術的・生物学的側面
第 23 章	歯周治療と矯正
第 24 章	歯周治療の展望
第 25 章	メインテナンス

表 2. Lindhe 臨床歯周病学とインプラント日本語版第 4 版[基礎編]の章立て

[基礎編]	
第 1 章	歯周組織の解剖学
第 2 章	歯周疾患における疫学
第 3 章	デンタルプラークと歯石
第 4 章	歯周疾患の微生物学
第 5 章	歯周疾患における宿主・寄生体相互作用
第 6 章	修飾因子：糖尿病、思春期、妊娠、更年期および喫煙
第 7 章	プラーク誘発性歯肉疾患
第 8 章	慢性歯周炎咬合性外傷
第 9 章	急速破壊性歯周炎
第 10 章	壊死性歯周疾患
第 11 章	歯周膿瘍
第 12 章	非プラーク誘発性炎症性歯肉病変
第 13 章	鑑別診断：歯周組織の腫瘍と嚢胞
第 14 章	歯内療法と歯周病学
第 15 章	咬合性外傷
第 16 章	全身疾患のリスクとしての歯周炎
第 17 章	歯周炎に関連する遺伝子

表 3. Lindhe 臨床歯周病学とインプラント日本語版第4版[臨床編]の章立て

[臨床編]	
第 18 章	歯周疾患患者の診査
第 19 章	治療計画
第 20 章	原因除去歯周治療
第 21 章	機械的歯肉縁上ブラークコントロール
第 22 章	歯周治療における消毒剤の応用
第 23 章	歯周治療における抗菌剤の応用
第 24 章	口臭
第 25 章	歯周外科：アクセスセラピー（到達性を高める術式）
第 26 章	歯と歯肉領域の細菌に対する歯周治療の効果
第 27 章	歯肉歯槽粘膜治療－歯周形成外科－
第 28 章	歯周組織の再生治療
第 29 章	根分岐部病変の治療
第 30 章	咬合治療
第 31 章	矯正治療と歯周治療
第 32 章	歯周サポート治療（SPT）

表 4. Lindhe 臨床歯周病学とインプラント日本語版第4版[インプラント編]の章立て

[インプラント編]	
第 33 章	オッセオインテグレーション：その歴史的背景と最近の考え方
第 34 章	チタン製インプラントの表面形状
第 35 章	インプラントと軟組織の付着（貫通粘膜付着）
第 36 章	エックス線診査
第 37 章	インプラントの埋入における外科的側面
第 38 章	歯槽骨形成法
第 39 章	吸収した歯槽堤の造成に用いられる術式
第 40 章	審美的ゾーンへのインプラント設置
第 41 章	歯列の荷重負担域におけるインプラント治療
第 42 章	インプラントを用いたリハビリテーション：ケースレポート
第 43 章	インプラントを固定源として用いる矯正治療
第 44 章	粘膜炎とインプラント周囲炎
第 45 章	インプラント患者のメンテナンス

2. ページ数について

第1版では、総ページ数が523ページであった。それに対して第4版では、「基礎編」が440ページ、「臨床編」が444ページ、「インプラント編」が250ページで、総ページ数が1134ページであった。

3. 章の数と名称について

第1版は、25の章から成り立っていた（表1）。

一方、第4版は45の章から成り立っていた。第4版の章の内訳は、基礎編が第1章から第17章までの合計17章（表2）、臨床編が第18章から第32章までの合計15章（表3）、インプラント編が第33章から第45章までの合計13章であった（表4）。

IV. 考察

第1版においては523ページであった総ページ数が、第4版においては、1134ページに増加していた。これは、2倍以上に増加しているということであり、盛り込まれている情報の量が著しく増加した結果だと思われる。

題名自体が「臨床歯周病学」から「臨床歯周病学とインプラント」となったことは、大きな変化と捉えることができる。第1版が発行された1986年頃においては、歯周病学の教科書にインプラント編が加わるということは、あまり想像されていなかったと思われる。「歯周治療とインプラント治療はもはや同一分野であり、切り離すことができない領域であることを強く証明している。」⁵⁾とあるように、約20年間における歯周病学の変化としては最も大きな点であると思われる。

第4版では、「基礎編」、「臨床編」、「インプラント編」の三冊に分冊されたが、第1版においても内容的には、「基礎編」と「臨床編」の二つが存在していたと考えられる。「基礎編」が第1章から第11章まで、「臨床編」は第12章から第25章までに相当している。

基礎編に相当する章の数が、11から17に増加しているが、新しい概念として加わったと思われるのは、第6章の修飾因子：糖尿病、思春期、妊娠、更年期および喫煙。第16章の全身疾患のリスクとしての歯周炎。第17章の歯周炎に関連する遺伝学。の三つの章である。これら三つの章は、「歯周病と全身疾患の関わりがペリオドンタルメディシンとして歯科医科連携の重要な鍵を握っている。」¹⁾とあるように、近年変化してきた大きな部分のひとつであるだろう。

臨床編に相当する章の数は、14から15にと、わずかに増加している。「第23章 歯周治療における抗菌剤の応用」は、第1版においては、若干の記述が見られていたが、第4版においては、一つの章として独立したものとしてあるようだ。「第24章 口臭」も、新たに独立した章である。また、「第27章 歯肉歯槽粘膜治療－歯周形成外科－」にある、「歯周形成外科」は、新しい概念である。「第28章 歯周組織の再生治療」は、第1版においては、「第19章 再付着と新付着」の中で扱われていた。まだ、再生治療が、臨床において広く用いられるようになるかは不確定であったと思われるが、現在では広く用いられるようになっている。また、第28章では新しい組織再生法についても述べられている。

第4版では、「第32章 歯周サポート治療 (SPT)」とあるが、これは、第1版における、「第25章 メインテナンス」に相当する。メインテナンスという呼び方が、SPT (supportive periodontal therapy) と変わり、概念も少し変化している。

第4版の第33章から第45章は「インプラント編」の内容を構成する章であり、第1版には全く存在しなかったものである。1986年の時点では、インプラント歯学に関する内容が歯周病学の教科書に含有されることは全く想像されなかったであろう。分量的にも第4版の全1134ページ中の250ページということで、全体の20%以上をも占めている状況である。

今回、Lindhe 臨床歯周病学の第1版と第4版の構成、ページ数、章に関して比較することにより、約20年間における歯周病学の変遷を概観することが可能であったと考える。今後、歯周病学の進展をより詳細に理解するためには、更に、個々の新たに発見された事実や現象、新しい概念に関して調べて行くことが必要である。

V. 文献

- 1) 和泉雄一, 沼部幸博, 山本松男, 木下淳博: ザ・ペリオドントロジー. 京都, 東京, 2009, 永末書店.

- 2) Lindhe, J.: Textbook of Clinical Periodontology. First Edition. Copenhagen, 1983, Munksgaard.
- 3) Lindhe, J.: Lindhe 臨床歯周病学 (岡本 浩監訳) 第1版, 東京, 1986, 医歯薬出版.
- 4) Lindhe, J., Karring, T. and Lang, N. P.: Clinical Periodontology and Implant Dentistry. Fourth Edition. Oxford, 2003, Blackwell Publishing.
- 5) Lindhe, J., Karring, T. and Lang, N. P.: Lindhe 臨床歯周病学とインプラント (岡本 浩監訳) 第4版. 東京, 2005, クインテッセンス出版.

(2013 年 12 月 24 日 受理)